

平成22年第1回まちづくりトーク

会 議 録

ゼロ・ウェイストへの挑戦！

限りなくごみゼロのまちをめざして

2010年（平成22年）4月17日（土）

10:00～12:00

市民交流センター 第2～第4会議室

【司会（福本市民協働課長）】 本日は悪天候の中、また御多忙の中お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまよりまちづくりトークを開始させていただきたいと思っております。私はまちづくりトークを担当しております市民協働課の課長、福本です。よろしくお願いいたします。

今年度の第1回のテーマですが、こちらの壁に張ってありますとおり、「ゼロ・ウェイストへの挑戦！限りなくごみゼロのまちをめざして」です。およそ2時間という限られた時間ですが、御参加の皆様のご積極的な御意見をいただければ幸いです。

ここで、お手元の資料について確認をさせていただきます。4枚お手元にごございますでしょうか。1枚目がまちづくりトーク次第です。2枚目が「生ごみ処理機などの購入費助成金制度」と題したものです。3枚目が「逗子市大型生ごみ処理機購入費等補助金制度」と題したものです。最後がまちづくりトークのアンケート調査票です。こちらにつきましてはお帰りの際に担当者のほうに御提出をお願いいたします。資料等の漏れございませんでしょうか。大丈夫ですか。

では、まずここで市長よりごあいさつを申し上げます。市長、よろしくお願いいたします。

【平井市長】 皆さん、おはようございます。4月とは思えない寒い日になりましたけども、本当にこういう日にかかわらずお集まりをいただきまして、ありがとうございます。大抵ごみをテーマにすると40人ぐらいはいつもは集まるんですけども、ちょっとさすがにきょうは少し出足が悪いようで、大変私としてももうちょっと考えなきゃいけないなと反省をしております。逗子市環境会議主催の環境連続講演会は毎回60～70人集まるんですけどね、市民のパワーの方を見習わなければいけないなと思っております。

今日はここにありますが、「ゼロ・ウェイストへの挑戦」ということで、ごみの減量等についてのテーマでお集まりをいただきました。一般廃棄物の処理基本計画というのが3月の終わりに策定されまして、その中で10年後に焼却量ですね、3分の1…3分の2と減らすと、それから最終処分量、焼却して埋め立てる灰などですね、これを10年後には10分の1に減らすと、そういう高い目標を掲げました。それに向かってようやくこの22年度以降ですね、とにかくこれはもう市民の皆さんと一緒に挑戦しなければできない課題ですので、スタートをまずこの4月に、ごみのまちづくりトークをやろうということで設定した次第です。今日お集まりの皆さんは、本当に日ごろからごみの行政には関心も高く積極的に参加いただいている皆さんばかりだと思いますので、是非より広く、5万8,000の市民に広めていくにはどうしたらいいかということをご皆さんと議論してですね、今日だけではありません、これ以後本当に地域に入って私もみずから先頭に立って、このごみの資源化・減量化に取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞ皆さんの忌憚のない御意見をいただければと思っております。

余談になりますが、昨日市議会の臨時議会がありましてね、深夜2時半過ぎまでかかって本会議が終わりまして私はそれで帰りましたが、議員さんたちはその後にもまた委員会が若干あったらしいので何時に終わったのか知りません。さすがに議員さん今日は一人も来られていないようですが、とにかく今日私はこの後午後には池子の関係の説明会が久木と沼間であるということで、フル回転で今日明日やりますが、是非今日皆さんの元気な御発言を聞いて私も元気を回復したいと思います。よろしくお願いします。

【司会（福本市民協働課長）】 はい、ありがとうございます。では、ここからの進行を、資源化・減量化を担当する環境都市部次長の深海の方にバトンタッチをしたいと思います。よろしくお願いします。

【深海環境都市部次長】 それでは、これより進行を務めさせていただきます。私の声はいかでしょうか、大丈夫でしょうか。私、今御紹介ありましたけども、環境都市部次長の深海と申します。よろしくお願いします。

初めに本日の出席者を、向かって、あちらですね、右側の方から御紹介いたします。本日は市民やメーカーの方々に事例紹介などをさせていただくために御出席をいただいております。まず、松本信夫さんです。「バクテリアdeキエーロ」という家庭用生ごみ処理機の考案者で、葉山町にお住まいです。次に、三洋電機株式会社の佐藤さん。大型生ごみ処理機のメーカーさんです。次に、山の根のファミリー逗子のガーデンクラブから井尾さんと野内さんにいらっシャっていただいています。次に特定非営利活動法人環境生物工学研究所の原口さん。消化型大型生ごみ処理機を初め、微生物を活用したさまざまな処理システムを考案されている方です。もう一方今お着きでございます。岡崎岩夫さんです。リサイクル広場の主催などをさせていただいている、逗子ゼロ・ウェイストの会を主宰していらっシャいます。次に、資源循環課主幹の鈴木です。資源循環課係長の中村です。それでは、こちら左側に移りまして、先ほどごあいさつ申し上げました市長の平井です。理事で環境都市部長の山際です。それから、後ろのほうに係員の松本がおります。それから平本です。以上、よろしくお願いします。

本日はまず第1部といたしまして、市の方針、施策の紹介として一般廃棄物処理基本計画の話、それから減量化・資源化の取り組みのうち生ごみ処理に関する事例と拠点回収など、新しい資源化の取り組みを御紹介いたします。その間いろいろ御質問もあろうかと思いますが、まずはお聞き取りいただきまして、後ほど第2部の市長とのトークの中で御質問もお受けいたしますし、トーク閉会后にですね、事例紹介された方と、それぞれあちらにブースございますので、個別にお話しもいただきたいと思います。お待ちしております。

それでは最初に一般廃棄物処理基本計画につきまして、鈴木から10分ほど御説明申し上げます。

【鈴木】 鈴木でございます。一般廃棄物処理基本計画を改定いたしましたので、その内容について御説明させていただきます。パソコンでの操作をしながら説明させていただきますので、失礼ですが着席して説明させていただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

一般廃棄物処理基本計画改定に当たりましては、各地区での意見交換会、市民アンケート調査等では皆さんの御協力をいただき、ありがとうございました。それで、一般廃棄物処理基本計画の概要についてこれから短い時間ですが説明させていただきます。なお、今回は内容について御説明いたしますけれども、詳細につきましては市のホームページ等に掲載してございますので、そちらの方をご覧ください。この一般廃棄物処理基本計画の計画期間でございますけれども、平成22年度から平成31年度までの今後10年間を見据えたものとなっております。

一般廃棄物処理基本計画は、ごみ処理基本計画と生活排水処理基本計画で構成されております。そしてこのごみ処理基本計画は、市民・事業所の皆さんと市が一体となつてごみの減量化や資源化を推進していくための指針となるものです。今日はごみ処理基本計画の中で今後実施してまいります施策、目標、先ほど市長の方から話ございましたけど、その目標について御説明させていただきます。

逗子市では限りなくごみゼロの町を目指してまいります。その他の廃棄物、いわゆる環境負荷の少ない町、持続的発展が可能な資源循環型社会の確立を基本理念といたしまして、ごみの減量化を図り資源化を推進することで、天然資源の消費を抑制し、環境への負荷が低減される資源循環型社会の確立を目指してまいります。そして将来的にはごみの出ない町を目指してまいります。

そして、こちらからは10年間の主な取り組みについて、その具体の施策について説明させていただきます。生ごみの減量化・資源化施策について説明してまいります。家庭から排出される生ごみについては、生ごみ処理容器等購入費助成制度を充実してまいります。さらに、新たに大型生ごみ処理機購入費助成制度を追加実施してまいります。そして、こちらについては後ほどまた詳細な説明はさせていただきます。あとそれ以外に排出される生ごみについては全量燃やさず処理するシステムを確立してまいります。

次に、事業系ごみについては適正処理を推進してまいります。事業者はその事業活動に伴って生じた廃棄物について、自らが適正に処理する責任を有しております。この処理原則に則り、現在の事業系ごみの収集手数料制度の廃止を含む収集コストの適正負担など、処理・ルールの見直しを行うとともに、処理手数料の適正化を図ってまいります。

資源化を推進するため資源化品目の拡大に努めてまいります。従来から行っている資源化品目

に新たに直接搬入ごみに占める割合が高い植木剪定枝を初め、廃食用油、廃蛍光灯等の資源化を進めてまいります。また、焼却残渣、破碎残渣の資源化について、最終処分場の延命化につながることから、その資源化についても検討をしております。これまで焼却残渣、破碎残渣は全部処分場で処理しておりましたが、その資源化について今後検討しております。

資源回収を推進するための拠点回収について、これを推進しております。そして、拠点回収は地域の拠点となるような場所、例えば地域活動センター、学校など、資源回収ボックスを設置して推進しております。ごみの減量・分別の徹底などに向けて戸別収集について検討を進めてまいります。戸別収集は排出者が特定できるため、家庭ごみの有料化との併用により大きな減量効果が期待できること、分別の徹底など、マナー違反对策になることなどが望めるため、今後採用に向けた検討を進めてまいります。ごみの問題に対する意識啓発や具体的な減量行動を促進するとともに、ごみの排出量に応じた費用負担の公平性を確保する観点から、家庭ごみ処理の有料化について検討を進めてまいります。

次、ごみの発生・排出抑制に関するプログラムづくりに当たって、市民・事業者等の参画を求め、ごみの発生者みずからのアイデアによる発生・排出抑制を推進しております。

次に、処理施設の整備について説明しております。焼却施設でございますが、既存施設の大規模改修を行い延命化を図り、計画期間中は既存施設によって処理を行っております。処分場につきましては既存施設の転圧による埋め立て空間の確保と最終処分量削減によって、計画期間以上の延命化を図ります。最終処分量の削減に当たっては、まず焼却量の減量化による焼却灰をまず少なくしていきます。それで先ほどお話ししました焼却灰等の資源化を行う、そういうことによって埋め立てる量を減らし、計画期間の延長を図っております。そしてそのほかの施設としまして、新たに生ごみ及び植木剪定枝の資源化のための施設を整備しております。

先ほど市長の方からお話ししました減量化・資源化目標でございます。これまで説明いたしました主な施策等を実施することにより、ごみの排出量をどの程度までの減量化させるか、あるいは資源化率をどの程度まで上げるのか、その目標とする具体の数値を設定しております。ごみ排出量につきましては平成20年度に比べ約20%の減量を目指します。そして資源化量、これは平成20年度に比べ約2.2倍増加させ、資源化率53%を目指しております。最終処分量は平成20年度に比べ約90%削減を目指しております。焼却量は平成20年度に比べ約63%…6割減を目指しております。以上が減量化・資源化の目標になります。

資源循環型社会形成に当たりましては、市民、事業者の皆さんの理解、協力及び自主的取り組みが必要不可欠です。そのため、各主体が相互に協力して活動が行えるような仕組みづくりを行

ってまいります。このため、皆さんの協力をお願いしたいと思います。

簡単でございますが、本当にさわりの部分でございますけれども、以上が現在これから計画期間10年間の間にやっていく施策及び今後設定している目標数値、本当に簡単でございますが、以上で逗子市一般廃棄物処理基本計画、説明を終わらせていただきます。詳細につきましては先ほどお話ししましたようにホームページ等に掲載しておりますので、そちらの方をご覧いただければと思います。どうもありがとうございました。

【深海環境部次長】 すいません、後ほどまた御意見もいただきますので。次にですね、生ごみ処理容器等購入助成事業につきまして中村から御説明申し上げまして、続いて松本さん、岡崎さんから簡単に事例紹介をいただきます。

【中村】 それでは続きまして、減量化・資源化の取り組みについてというパートに移らせていただきます。今、一般廃棄物処理基本計画の改定についてお話がありましたけれども、その中で今年度取り組みを始める事業について紹介します。

まずこれを見てください。平成20年度の逗子市の一般家庭から出るごみの組成分析の結果です。これ見ると生ごみはこれ湿ベースと書いてあるんですけども、乾かす前の水分が入った状態で組成の分析をしたときに全体の40%あります。それからその次、切った木・わら類、これが14.2%、これでもう50%を超えてしまっています。今この生ごみと植木剪定の枝、これの処理が非常に重要なテーマになっています。それで平成22年4月1日、今月の4月1日から生ごみ処理容器の助成率を、今までの2分の1から3分の2へアップしました。上限額は3万円が変わっていないのですが、電動式のものには購入金額が6万円を超えるものは、これからも助成額は3万円が変わらないのですが、電動式でないものについて、これからもっと普及させていきたいという意図もあります。それから、植木剪定枝の粉砕機、これも今すべて燃やすごみに出されていますが、家庭でこれを粉砕して庭に戻すなど、剪定枝の粉砕機を助成対象に追加しました。これによりまして、対象の機種が今コンポスター容器、EM処理容器、電動式の乾燥式・バイオ式、この写真は乾燥式です。それから写真を用意できなかったのですが、手動の処理機、それから通気式生ごみ保管容器、あと土中埋め込み式というものがあります。それから今回新たに剪定枝粉砕機。そして、これがですね、去年の10月から助成対象にしたんですけども、透明または半透明、天蓋つきで、黒土を活用して使用するものという形でやっておりますが、商品名「バクテリアdeキエーロ」というもので、後でこれ松本さんのほうから御説明があります。昨年後半から今年にかけてこれが一番今売れ筋…ではなくて、補助の申請が一番多いです。助成の申請に必要なものなんですが、これは前と変わっていないくて、コミュニティーは問いませんので、領収書を必ずとってメーカー

名、型番を必ず記入してもらってください。そしてその領収書と印鑑と口座番号がわかる書類、この3つを持って市役所の資源循環課にいらしてください。申請用紙はそこに置いてありますので。あとはホームページからも申請用紙はダウンロードできます。

続きまして、今、絵にありました「バクテリアdeキエーロ」の特徴などについて、松本さんからお話をいただきたいと思います。

【松本】 おはようございます。松本です。私は葉山に住んでいるんですけども、いつもいつも逗子のごみの取り組みについては行政初め市民の方々の活動もすごいなと思って、とてもうらやましく思っています。葉山の方ももう少し学んでくれればいいのになと思っておりますけれども。それで、生ごみ処理についてはですね、全部一緒だと思いますので、「バクテリアdeキエーロ」の特徴ということに特化してちょっとだけお話ししたいと思います。それで、現物がこちらにありますので、後ほど質問等ございましたら直接お話しできると思います。

それで、いくつか特徴を挙げるとするとですね、ほかの処理方法との差ということ言えば、とりあえず始めた後はランニングコストがかかりません。全く土の中の微生物の働きで処理しようとしていますので、1年たって何か換えるとかですね、最初に発酵促進剤入れるとか、何か特別な機材を入れるとかそういうことがありませんので、そういう意味ではトータルで考えれば悪い選択肢ではないのかなと思います。

それで、今ここに出ていますけれども、これ私のうちなんですけど、庭に直接置いているやり方です。土の上ですね。それで、何がいいかと言うとですね、まず匂いが出ないということと、虫の発生が非常に少ない、ほとんどないと言ってもいいと思います。それから、ごみを入れ続けていっぱいになったらどうするんだという御質問がよくあるんですけども、1年たっても2年たってもほとんど量が増えません。ですから、1年たってどこかに捨てるとか、また入れかえるとかそういうことがありませんので、私のうちも10年ぐらい続けていますけれどもほとんど量が増えていきませんので、その辺りがメリットなのかなと。それと、他の処理方法に比べるとですね、よく生ごみの処理というと、よく水を切ってくださいと、とにかく水を切って、水を切ると言われるんですけども、これは、水は土の中に吸収されてしまいますので、水を切る必要は全然ありません。むしろ結構乾燥しますから、何も水切りしないで、土に入れるときは水をかけるほどです。ですから水切りをしなくていいということですね。それとほとんどの食材が投入可能だと。例えば貝とか動物の骨とかそういうのはずっと残ってしまいます。ですけども、大量のイカのワタとか、魚の内蔵、それから魚の骨、魚の骨は時間かかってもこれは消えてくれます。あと腐ったもの、それから液体物、煮物の残りとかですね、冷蔵庫の中で腐ってしまったもの等

も問題なく入れられます。そういうところが特徴かなと思いますので、場所があれば選択肢としてはいいのかなと思います。ただ、魔法の箱ではありませんので、多少冬場に温度が落ちたときに分解速度が落ちるとかいろいろありますので、工夫は必要ですけれども、もし場所があればいいかなと。それで、やはり逗子、鎌倉の方なんかとお話すると、場所がないと、庭がないとかいうこともありましたので、このベランダに置けるタイプ、あと集合住宅、アパート等で土に直接置かなくてもいい形を新しく作り始めまして、この間の冬、12月、1月、2月、日が当たらないところでも何とかなるということが実証できましたので、今後多分こちらの方に移っていくのかなという気はしてます。以上です。よろしくお願いします。

【中村】 終了後に個別に質問タイム設けますので、また後でよろしくお願いします。

それでは次、コンポスト容器について、岡崎さんから体験談等をお願いいたします。

【岡崎】 皆様おはようございます。岡崎と申します。それではコンポスター容器のほうに関して説明いたしますけども、今の松本さんからあった「バクテリアdeキエーロ」との比較においてちょっとお話ししたいと思います。コンポスター容器、これですね、皆様御存じだと思いますが。この利点から言うと、これを買ってきて庭にぽっと置いて、ふたをあけて生ごみをどんどん入れておけばいいと、非常に手軽なことは手軽です。ふたを閉めればにおいは出ません。ただ、その難点としましては、ふたをあけると虫がわっと出てきます。使ったことある方よく御存じだと思います。生ごみを入れようとして中をのぞくとウジがうわっとうごめいている状態です。これはなかなかおぞましい光景ですが。それがもう何といても大きな難点で、それを解決するためにはいろいろちょっと工夫は必要です。

何でそんな状態になるかと言うと、生ごみは御存じのとおりほとんど水分ですね。ですから、これをどんどん入れていくだけではこの中がもう水分が過多、過剰な状態になって、どんどん物が腐って、入れた物が腐っていく。腐敗しておえば虫なりウジなりが寄ってくると、そういう形になるので、これを何とか乾かしてあげなければいけないという手間がちょっと必要になります。それにはどうしたらいいかと言うと、例えば晴れた日にはふたをあけておいてあげるとか、あるいはこの湿った状態を中和、水分を調整してあげるために、例えばもみ殻ですとかおがくずですとか、あるいは落ち葉ですね、乾いた落ち葉ですとか、そういうものを一緒に入れてあげて、そして水分を調整、あまり濡れた状態におかないようにする、そういうちょっと工夫が必要です。

それとですね、もう一つは時々中をよくかきまぜてあげることで、土の中の通気性ですか、空気を、土の中にも空気を入れてあげたりする。そうすればバクテリアが活性化しまして、生ごみの分解も早くなるし、腐らない状態になるのでにおいなども抑えられるということですね。

それからもう一つ、先ほど虫の、ウジの問題ですけれども、これウジはハエじゃなくて、アメリカミズアブというアブの種類なんですけれども、人畜無害という、アブと申しましても人を刺したりするのではないんですけれども。見方によってはこのウジがですね、一生懸命分解してくれるんだと、そういう見方ができれば、それでいいんだという人もいます。僕自身もあまり大して気にならないので、最初のうちはもうウジのうごめきを見ながら投入して、ほら、えさだぞみたいな形で投入していたものなんですけれども、もうちょっと良好にしようかなということでそういう工夫をし始めました。そして、ウジがわからないように、虫がわからないようにするには、先ほどのキューロの場合でも同じですけれども、ちょっと穴を、そこに穴を掘ってあげて、そこに生ごみ入れて土を掛けてあげる。だから虫が直接今までのようにたからないような状態にしてあげるという、そういうことも必要です。

そのところで先ほどのキューロと比べると若干これ手間がかかりますが、何ととってもこれコンポスター容器の一番の利点というのは、このコンポスターというのはもともと堆肥という意味なんです。この堆肥づくりという点ではこれはなかなか便利なものだと思います。特にその落ち葉、家から出た落ち葉とかあるいは草むしりしたらその乾かしてあげてそれを入れてあげる。生ごみだけだと、先ほどのキューロの場合でも土がふえなくてなかなか堆肥になりにくい、堆肥として使いにくいということですが、そうやって落ち葉を入れたり何かすることでどんどん堆肥、それと生ごみを一緒にしてあげることで良質というか、早くいい堆肥ができてくるという、そういう利点はあります。そんなところだと思います。

【深海環境部次長】 ありがとうございます。それでは続きまして、大型生ごみ処理機設置助成事業につきまして、中村からの説明に続きまして三洋電機の佐藤さん、ファミリー逗子ガーデンクラブの井尾さん、野内さん、環境生物工学研究所の原口さんの順番で、簡単に事例紹介をしていただきます。

【中村】 それではですね、大型生ごみ処理機の設置助成事業について、市の取り組みを説明させていただきます。まず、これは山の根のファミリー逗子に設置させていただいています大型生ごみ処理機です。これは導入調査事業として平成15年3月から設置をさせていただいています。これが投入部分のところですね。これが平成16年3月から設置しています沼間南台住宅の生ごみ処理機です。これが投入部分のところ。この事業につきましては、最初ここでできた堆肥がなかなか流通しなくて、市の方で取りに行ったりしてたんなんですけれども、何年かしているうちに、もう地域ですべて今この堆肥循環してしまっていて、もう市の方では年に1回だけ、2月が堆肥はダブつくんですね。その時期にあまり使わなくなってしまうので、その1回だけ沼間南台とフ

ファミール逗子のものを市の方で取りに行き、そこから持ってきたものは運動公園のお庭とか、あと図書館の庭のところに使ったりしています。この事業について、この導入調査は今年度でおしまいにして、今年度からは設置に対しての補助金を出すという事業に変えました。もう1点の大型処理機なんですけど、先ほどの堆肥型の処理機で、これは消化型で、特別養護老人ホーム清寿苑と、逗子ホームせせらぎの2カ所に実験的にこれを置いています。後ほどこれは原口さんの方から説明があります。

今年度から始めます大型生ごみ処理機設置助成事業について説明します。目的は処理機の一部を補助することによって生ごみの減量化・資源化を促進して、資源循環型社会の形成に寄与するのが目的です。補助の対象者が自治会または集合住宅の代表者。対象の機種は処理能力1日10キロ以上の機種としています。

補助金額なんですけれども、大型の場合はリースのものもありますので、購入の場合とリースの場合に分けてます。まず購入の場合なんですけれども、本体費用プラス設置費用の3分の2で、1世帯当たり3万円を限度で補助を出します。ですので、例えば150万円費用がかかって50世帯だとしますと、150万円の3分の2で100万円ですね。100万円を50世帯で割ると1世帯当たり2万円になりますので、3万円の限度までいかない、1世帯当たり2万円で合計100万円の補助金という形になります。あと、処理機の賃借、リースの場合なんですけれども、これは賃借費用、設置費用プラス保守費用の3分の2を補助します。これも1世帯当たり3万円を限度で、これは5年ですと複数年にわたると、複数年に分割して補助金を交付するという形にできます。

申請の方法なんですけれども、これ交付申請を市にさせていただいて…あ、その前に調整しますので、資源循環課の方にお問い合わせください、まず。申請して内容を審査して交付を決定します。それから交付の請求をしていただきまして、ここでもう一回現地確認して補助金の確定をして補助金を交付します。毎年年度末に実績報告を出していただく形になります。詳しいことはまた資源循環課の方にこれはお問い合わせください。

続きまして、大型生ごみ処理機堆肥型、本日三洋電機株式会社の佐藤様いらしていただいておりますので、この機械について説明よろしくお願ひします。

【佐藤】 皆様おはようございます。三洋電機の佐藤と申します。長年生ごみ処理機の販売に携わってきまして、研究も重ねてきました。現在私、太陽光発電とかリチウム電池の、ちょっとこのいろいろ仕事の範囲を広げてやっておりますけども、この生ごみ処理に関してはかなり愛着を持って進めておるところです。

先ほどの松本さんの「バクテリアdeキエーロ」のお話を聞きまして、あれが一番いいと思いま

すね（笑）。自分で今日これから説明する前にちょっとライバルなんですけども、何でもすね、現代人の方は非常に我がままで、御飯炊くのもスイッチポン、お風呂の湯沸かすのもスイッチポン、車で事故起こしたら車が悪い、こういう時代にすね、もう一度自分の手足を動かして土に触れて生ごみを処理をする、これ非常にいいことではないかなと思います。多少の手間はかかるし、多少の勉強もしなくてはいけないのかなとも思いますけども、そういったところがかえっていいのかな。特に江戸時代なんかは世界でもまれに見るクリーンな都市だったというふうにも言われてまして、当時人間の人糞だとか生ごみだとかはすべて100%リサイクルされていたと。現在もようやくそのときのものを見直されて、それに回帰しようよという運動も起きているようですけども、そういった中でこの松本さんつくられたこの製品、大変すばらしいと思います。

私どもの三洋電機の商品はどちらかというと電気メーカーのつくっているものですので、便利さとか耐久性だとか、そういったことを考えていますので、どちらかというとスイッチポンの世界で、入れたらあとはすべて機械にお任せで最後までやってくれるというようなことから発想が出てきております。機械のラインナップとしては1日の処理能力が20キロ、30キロ、ここにパンフレット持ってきていますので、後でとっていただければいいんですけども、20キロ、30キロ、50キロ、100キロというふうな4つの機種ラインナップを揃えております。

それで、機械の特徴なんですけども、バイオ乾燥式ということで、生ごみはきれいに処理させるためには好気性発酵、つまり空気を与えて分解させなければならない。これは先ほど松本さんの「バクテリアdeキエーロ」でもあったお話と同じですけども、やはり空気を与えて攪拌していかなければならないということで、攪拌をして微生物の力を借りて分解をします。同時に加熱をする、60度ぐらいに加熱をします。これは最後に乾燥をさせて、さらさらの状態にして取り扱い性を良くしたい、誰が運ぶにしてもべたべたの状態とか、少し匂いがするとか、そういう状態だとやはり誰か持って行ってよと言っても持って行ってくれませんので、そういったときに衛生面ということもありまして、60度の加熱を最終的に処理をしております。

それから脱臭。どうしても都市部ですと人が、たくさん住んでいるところでこういった装置を置きますと、匂いが出てしまうとやはりクレーム、現在特にそのクレームに関して敏感な時代になりましたので、この点に関しましては私ども開発をしました。10年前から技術は確立しております。匂いのもとを機械内部で300度に加熱した装置に通して、化学反動的に言うと燃えるということなんですけど、実際に火を出して燃やしているわけではなくて、匂いは高い温度にさらされると炭酸ガスと水蒸気に分解をして外へ散っていくと。現実に座間市の保育園で使っていたところなんですけども、機械のすぐ3メートル横が隣のおたくの窓があるというようなとこ

ろで設置をいただいているんですけども、今のところクレームは一度も来ていないと。機械のすぐそばに鼻を持っていきますと少しにおいますけども、1メートル離れるともう町の中のほかのにおいと区別がつかないぐらいにわからなくなります。もちろんパッと開けたときには匂い出ますけども、扉を閉じるともうほとんどわからないというようなことです。

そのほかには機械のメンテナンス、機械はもちろん電気製品ですので電気代がかかりますけども、そのほかに何がいるのということになりますと、よく水をつなぐとか、半年に1回何かを、バクテリアを買って追加してくださいとかいうのがありますが、三洋電機の私どものこの製品に関しては電気代だけ、一旦動き出したら追加で何かを入れる必要もありません。現実に私のおります東京のオフィスではもう10年使っていますけども、一旦立ち上げた10年前から一度も追加をせずに使っています。ただ、現在食堂を閉めてしまいましたので、機械も今スイッチ切っていますけども、10年間風雨にさらされて雨ざらしのまま使っていますが、一度も壊れずにきております。それから機械のメンテナンス、使ってみて万が一壊れたらどうなのという場合には、私ども全社の業務機器のサービス体制がありまして、24時間365日いつでもフリーコールで電話がつながる。ただ、1時間以内に来いと言われるとなかなかそうはいかないんですけども、とにかく連絡がつくというような体制を全国的にフリーダイヤルで引いておりますので、そういったアフターサービスの面でも御安心して導入をいただけるのかなというふうに考えております。

それから、生ごみ処理の機械から出てきた処理物、これは堆肥にするというお話よくあるんですけども、今お隣にいらっしゃる逗子のファミリーハイツのガーデニングクラブの方でも現実に野菜づくり、花づくりに活用されているんですが、出てきた茶色い粉末、後でサンプルをごらんいただくといいと思うんですけども、あれを畑に使うというふうな方法も、よく私、小学校なんかで御説明をさせていただいています。

一つのいい事例としまして、調布市立の布田小学校の50キロタイプを入れているんですけども、1年間敷地の外に一粒も処理物を出さないで、すべて校庭の中で使っていただいています。私が考え出したその堆肥をつくるスペースですけども、「バクテリアdeキエーロ」にそっくりなので、今日見てびっくりしたんですけども、やっぱりこれはすばらしいんだなと思います。やはり生ごみの中にはですね、非常に肥料成分が含まれていますので、これを焼却してしまうのは逆に非常にもったいない話ですね。野菜づくりに有効な窒素やリンやカリが豊富に含まれていますので、これを生ごみ堆肥という形にして使っていけば、ただごみが減ったというだけでなく、野菜づくり、楽しみというのも出てくると思いますので、楽しんで使っていただきたいと思います。はい、以上でございます。（拍手）

【中村】 佐藤さん、ありがとうございました。後ほどの個別のトークタイム、よろしくお願ひします。

続きまして、ファミリー逗子の、ファミリー逗子公園の里親になっていただいています山の根のファミリー逗子ガーデンクラブの野内さん、井尾さん、いらっしゃっておりますので、この生ごみ堆肥を使った活用などをお話ししていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

【井尾】 ファミリー逗子ガーデンクラブの井尾と野内です。ファミリー逗子ガーデンクラブといますのは山の根にありますマンションの植物好きの同好の者が始めた緑のボランティアのグループでして、20年以上、毎週木曜日の午前中、ファミリーのマンションの敷地内とそれから里親になっています隣の公園の手入れをして緑を育てています。大型の、その今お話の生ごみ処理機は市の実験第1号としてファミリー逗子が7年ぐらい前に導入しました。導入に当たっては住人への説明会とか、やはり音、匂いなんか非常に不安でして、確認を慎重にしまして、アンケートもとりまして導入しました。で、今のところ7年ほど使っているんですけども、住人からはもう至って好評です。生ごみはいつでも捨てられるし、ごみの収集場は清潔だし、それで維持管理も意外と楽で、管理人さんが週に一度ふいてくれて、2～3週間に一度その堆肥をかき出してくれて、あと半年に一度業者さんから点検があって、ほとんど問題なく動いています。実物は私も今ここに持ってきましたので、後で見てくださればいいと思いますが、サラサラしています。

生ごみ処理機から出るその堆肥なんですけど、確かに堆肥をつくるのはその機械任せでということなんですけども、この利用するのがやっぱり手間暇かかりまして、でも非常にごみを循環させて有効利用をしているということになりますし、私たちのガーデンクラブの作業にも使って、あと隣近所の、近隣の方たちにも有効利用をしてとても喜ばれているんですね。その利用の仕方をちょっと野内さんの方から話しますが、聞いてください。

【野内】 野内です。それでは、ごみ処理機からできる堆肥の利用状況の一端をちょっとお知らせしたいと思います。ファミリー逗子の場合は灌木類が非常に多いのですが、その木の根元に敷地内で作った腐葉土と周りの土とこの堆肥をまぜて、木の根元を覆うようにして置いておきます。これは木にはとても優しい方法で、肥料分と木の根を守るという効用がありまして、これによって木の勢いもよく、たくさん花もつけてくれます。

それから、トーテムポール広場の場合、ここは山の根自治会でお世話しているところなんですけど、場所は金沢新道踏切を山側に渡って、自転車置き場の角にあるところです。ここでの堆肥の使い方は公園のコーナーで囲いをつくり、1カ月以上、時々ひっくり返しながらか完全発酵させた後、発酵鶏糞をまぜて元肥として使用しています。ここでは隣肥肥料以外、化学肥料は全く使用

せずに年じゅう花を絶やすことなく、花の公園といったところです。とても小さい空間ではありますが、地域住民の憩いの場となっています。畑に利用している場合は、土とこの堆肥適量をまぜて苗を植えつけるとすばらしい作物ができるよと大変喜ばれています。私どもファミリー逗子では幸いにも大型処理機を設置できる場所があり、雨水をためる樽も設置していますし、落ち葉は公園を含めて山のように出ます。落ち葉や雨水やごみからできる堆肥を利用する一昔前のような暮らしは非常に手間暇のかかることではありますが、私たちはささやかながらも循環型の優しい暮らしを、手探りしながら目指していきたいとみんなで思っています。ありがとうございます。

(拍手)

【中村】 野内さん、井尾さんありがとうございました。続きまして、消化型の説明に入ります。特定非営利活動法人環境生物工学研究所、原口さんから、消化型の生ごみ処理機について説明をお願いします。

【原口】 こんにちは。環境生物工学研究所の原口と申します。短い5分という間ですけど、100%御理解いただけるのか、あいつ何言っているんだろうと、わけのわかんないことを言うかもしれないんですけど、あとの時間帯を利用していただいて質疑はさせていただければと思っています。

今ちょうど後ろにありますけれども、同型機でこれは1日100キロを処理する機械です。逗子さんの中に、うち非営利ということで地域活性と環境を重視した形で活動をしているんですけども、こちらの逗子市さんのほうでは清寿苑さんとせせらぎさん、ここ2台入っています。どういうやつかと申すと、具体的に言いますと都市型タイプと言っているんですけど、ごみをなくしてしまおうと、ゼロにしてしまおうというものがうちの装置なんです。そちらの両方の施設にですね、水道メーターと電気メーターつけているわけです。電気をどのくらい使うかと言いますと、大体1日50キロ生ごみを処理して月に1.5トン、電気代は幾らと言うと100円と150円。これで大体1.5トン処理しています。今は九州にもモニターを置いていまして、あとは神戸、そちらにも置いていますが、そこの施設では約100キロ出しています、毎日。それでこの間見に行ったんですけど、70円、これは月電気料です。水道は、あそこにちょっとたばこを置いているんですけど、あれキャスターといいまして290円なんですけど、水道も使うんですけども、あそこ水道ついていますけど、結局ごみを入れたときにバケツ洗ったり周りの縁を掃除したりということで、1カ月当たり約2トンを使うということで、当然なくなってしまうという言い方するんですけど。

バクテリアというのはパターンがいくつかあるんですね。具体的に大分類すると肉食と草食がいると、動物系に。バクテリアにもそういうのがいるということですね。だから、一菌体で全部

処理できるというものではまたないわけです。大きいものほうは今、海の方に、こんにゃくとかテングサとか、これ非常に難しい繊維質が多いところなんですけども、1日1トン処理しています。それもやはり入れてなくなってしまうという装置なんですけども、そういった、入れてしまうとあと何するかと言ったら今言われる、炭酸ガスとよく言われるんですけど、二酸化炭素ではないですね。二酸化炭素というのは化学方式でやるとそのCO₂という正解になってしまうんですけど、バクテリアから発生するのはメタンガスなんです。それからアンモニアですね。それからメチルメルカプタンと。ごみの種類によって要は発生するガスの質が変わってしまうというんですけど、それで複合種と言います。複合種なんですけど、アンモニアとかそれがどうなるんだと言うと、簡単に言いますと化学方式が成り立つんですね。必ずHとかLとかいう化学方式が成り立ちます。うちのほうはそのにおいをどうやってするかと言ったら、そのH菌、H菌って水素菌なんです。これを足してあげる。そうすると化学式が成り立たなくなってしまうんですね。においの形態が壊れてしまう。

昨年も10月の11日だったですか、南極にうちプレゼントしました。今年3月にも設置して、多分変わってきていると思います。来週20日の日に極地研究所に行って一応内容を聞いてくるんですけども、要は南極の方でも生活していますから、そのときにやっぱりごみが出ると。今までは持って帰ってきていられたんですね。やはりアメリカとか海外の方もやはり持って帰っているみたいですけども、どうしても持って帰ってくるということになると向こうで保管する施設とかいろいろ問題があるということで、1日30キロぐらい最大出るよということで、うちはその30キロタイプをちょっとプレゼントしました。30キロで、極地というぐらいなので、極めて厳しい地域、極地ということなんですけども、その中でこの菌がもっとも大丈夫かという世界あるんですけども。

先ほども言われたんですけど、環境づくりですよ。我々もそうなんですけど、家に住んだときにはやっぱりクーラーがあったほうが生活しやすい。先ほどのように温度関係とか菌の種類によって変えていかなければいけない。生ごみの複合種という、複合生ごみといういろいろなものが混ざったものはビタミン剤とかいっぱい入っていますから、非常に簡単に処理しやすい。一番難しいのは単体ですね。テングサとかあとはこんにゃく。今来ているのがですね、卵の殻なんです。手割り作業とって、卵の殻なんです。これできないかというあるんですけど、いろいろ悩みましてね、来週また行くんですけど、一つだけ方法があるわけです。それはどういうことかと言いますと、牛乳って御存じだと思いますけど、非常にそのカリウムとカルシウムの固まりなんです。それはどういうことかと言いますと、ある大手の牛乳メーカーさんの試験をやらさせ

ていただいたわけなんですけど、要は白濁したやつが約6500 p p m、濃度のことを6500 p p mと言うんですけど、それが300に減ってしまったということで、そういう実績があります。また、それを継続して新年度予算でやっていこうということで今協議させていただいているんですけど、卵の殻もそういう状態なんです。要は、それを早く処理する方法に一つだけ方法があるんです。それを今回今度来週打ち合わせしてきますけども、やはり単体、単体のごみというのは非常に難しいと。栄養源が非常に少ないと。その栄養源の足りないもの、我々もそうなんですけど、やっぱりビタミンとかいろいろな要素がいるんですけど、彼らも生き物なので、そういう要素を与えないとやっぱり活動できない。よく熟知しないとやっぱりできないというのがそこなんですけども、それが一つの例で言うとそういうふうにとできると。これは立証することが一番理想だと思うんですけども、そういった形でうちは都市型のタイプとして、なおかつ販売でなくてお客さんに負担をかけないレンタルという、貸し出すという形で広範囲に動いていこうということで、積極的に全国展開始めています。以上でございます。またわからなかったらまた後で質問してください。ありがとうございました。（拍手）

【中村】 原口さん、ありがとうございました。終了後の個別のトークタイムよろしくお願ひします。

【深海環境部次長】 それでは次にですね、資源化品目拡大試行事業につきまして平本から御説明申し上げます。

【平本】 改めまして資源循環課の平本と申します。私のほうから資源化品目の拡大試行事業の概要について御説明をさせていただきます。

まず、この事業は国からの資金をもとに県につくられた基金を活用した神奈川県補助事業となります。事業は大きく2つのねらいがあります。1つ目は植木ごみの資源化の試行です。正面のスライドの一番上と真ん中の項目ですね。ごみの減量化・資源化を進めるに当たり、燃やすごみのうちでは生ごみとともに植木ごみを資源化することで、燃やすごみの減量効果が大きなものとなります。植木ごみには造園業者の方が市民の皆さんに頼まれて庭木の剪定をしてクリーンセンターのほうに持ち込んでいただくもの、また、市の事業として公園の樹木、街路樹などの剪定で出てくるもの、それから皆さんの御家庭で庭木を切ったりしてステーションのほうに燃やすごみの日に出されるもの、この3つがございます。これらについては今後10年間のうちに全量化を資源化する計画であります。まずはこのうち市の事業で出てくる植木ごみを中心に、持ち込みごみの一部について資源化を試行するもので、そのためにチップパーという機械を購入いたします。このチップパーという機械で枝葉を細かく粉碎し、それを公園ですとかハイキングコースなど

に散布をしてみたいです。また、御家庭用にも小さな小型のもので、2番目にありますけれども、こらちの小さな粉砕機を購入をして貸し出しを行う予定となっております。

もう一つのねらいというもので、拠点回収方式による資源物の回収の試行となります。現在逗子市のほうではステーション方式により一般廃棄物を6分別し、定点回収を行っておりまして、ペットボトル、容器包装プラスチック、空き缶、空き瓶、紙、布類、この6分類に分けて、資源物をステーションなどで収集をしておりますが、今回は新たに拠点回収方式というもので、これまで分別収集していなかった資源物を中心に、新たに回収を試行的に行い、効果や課題を検証していくものとなります。スライドの方にもございますが、市役所、あと小坪・沼間の公民館、この市内3カ所で7月ごろから回収をする予定となっております。また、回収品目、これは一番下ですね、につきましては、現在不燃ごみとして収集し粉砕して処分場に埋めております廃蛍光管と水銀式の体温計、あと燃やすごみとして収集し、現在焼却処理をしております廃食用油ですとかビデオテープ類、これらを資源化をいたします。また、現在も資源ごみとして収集をしております空き瓶や乾電池等、皆様の利便性を考慮して、あわせてこちら拠点回収を行ってまいります。今後につきまして回収品目や回収拠点などについて試行の状況を見ながら順次拡大・充実を図ることとしてみたいです。以上で説明を終了いたします。

【深海環境部次長】 はい、以上、一部、長くなりましたけど御説明させていただきました。休憩等はいれなくて進めさせていただきます。各自休憩をお取りいただきたいと思います。

それでは第2部ということで、先ほど市長からゼロ・ウェイストへの挑戦につきましてあいさつの中にありましたけれども、改めて補足説明等を含め、市長の進行によりましてこれから自由に意見交換をしていただきたいと思います。それでは市長、よろしく願いいたします。

【平井市長】 大変長い時間かかって説明をいたしました。でも、それぞれの皆さん本当にいろいろな観点からお話をいただいて、参考になったと思います。特に私はファミリーさんのこの取り組みにすばらしい感激を覚えまして、あそこの金沢新道の公園がまさかあそこの堆肥からあんなすばらしい花が咲いているというのは、お恥ずかしながら、今初めて知りました。堆肥がこうして循環して地域の彩りを添えて、皆さんの暮らしが豊かになっていることはすばらしいなと思って、いや、これは是非いろいろな地域で広めていただいて、ちょうどその公園の管理というのは緑政課がやってまして、アダプトプログラムと言っていますけれども、地域の人に里親とって公園の管理をしていただくボランティアに参加していただいて、公園の清掃をしたり、今のその草刈りをしたり、花を育てていただいたりということを地域の公園としてやっていただいているんですね。それが今度この資源循環の方の生ごみの堆肥化とセットになってやるというの

は、本当にすばらしい市民との協働だなという感じしました。それであると、ゼロ・ウェイストということをおね、ごみを捨てない無駄のない暮らしをしようと、こういうことなんですね。それを
ごみにしようと思っていると、今まで捨てて、燃やしたり埋めたりしていたものが、実はお金を
かけずに処分しなくても自然に循環をして、リサイクルもでき、堆肥などは本当に活用できると、
そういう暮らし方を進めていて、できるだけ捨てるものは減らして自然と共生した暮らしをしよ
うと、そういうことなんです。ですから、わかりやすく言うと「ごみゼロ」を目指しましょうと、
こういうことになります。

それで、私の方からあまり長く話してしまうと皆さんフラストレーションたまると思いますけ
ど、2点ぐらいお話ししたいと思います。今、ごみの処理費に年間一体幾らかけているかと。大
体市の予算が160億円ぐらい、1年間の一般会計ですけども、そのうちの約10億円がこのごみの
処理にかかっています。10億円です。比較で言いますと大体逗子の学校教育、小学校・中学校、
これにおおよそ10億円かけて、学校施設等の整備であるとか給食であるとか、いろいろな教材を
そろえたりいろいろなことをしています。したがって、ごみ処理費用にどれだけかけているかと
いうことですよ。しかも、ごみというのは捨てて燃やして埋めてしまえばなくなってしまいま
すから、それは皆さんにとっては大変大切なことなんですけれども、これをとにかく極力減らし
て、できればあまりお金をかけずに処理できる、あるいは処理しないで済むということにして
すね、何とかみんなの協力でお金を浮かしたいんです。そしてその余ったと…余ったと言うと変
ですけども、無駄を省いた分を福祉であったり教育であったり、そういうのに回りたいなとい
うのが1点。

じゃあ、どうすれば浮くかという。先ほどごみの組成を出しました。40%が生ごみ、十数%が
植木関係。これは御承知のとおり、堆肥化したり、そして燃やさないで済むごみです。これを全
部減量化・資源化するというのが今回の計画の目標ですから、そうすると燃やすごみはもう半分
以下で済むんですね。なおかつ、さっき「バクテリアdeキエーロ」とかコンポスターとかありま
したけど、御家庭でこれを自家処理してもらえれば増えるほど集める必要がなくなり
ますから、集めるコストも減らしたい。焼却するコストも減らしたい。生ごみでも燃やせば灰に
なりますから、わずかではあっても。ということは、最終処分の回るお金も減らしたい。今まで
逗子は最終処分にほとんどお金をかけずに、この何十年来済んできたんです。たまたま、本当に
池子の皆さんに申しわけないんですけども、池子のところに最終処分場があつて、ほとんどお金
をかけずに、最終処分のコストが年間800万円ぐらいだったと思います。それで埋め立ててる、
ところがどっこい、これがもう残容量がもうなくなってきた。これを2億数千万円かけて転圧、

圧力かけて容量をとにかく増やして何とか持たせなければいけない。それを今年、来年とやるんですけども、それだけで2億数千万円かかってしまう。ようやくそれで7、8年最終処分の延命化はできるんです。

でも、今と同じようにごみを捨てて埋め立てていたら、また8年後には最終処分場がなくなってしまう。そうすると今度はさすがにもう圧力かけて容量を増やすことはもうできませんから、そうすると今度はお金を払ってでも外で処分しなければいけない。もう他の自治体は鎌倉もそうですし、葉山もそうですし、自分のところに処分場はありませんから、お金を払って捨てているんです、あるいはリサイクルしているんです。鎌倉は資源化日本一なんですけど、もう50数%資源化しているんですけど、それはなぜかという、最終処分の灰をすべて外に持って行って、お金を払って資源化しているからなんです。だから、逗子もお金を払ってその灰を資源化すれば今でも、すぐにでもリサイクル率50%になるんです。ところが、処分場に捨てているので今20数%の資源化率なんですけど、早晚、逗子もお金を払って灰を処分しなければいけなくなります。今の1年間に出ている主灰の量を外で資源化しようとする、年間8,000万円ぐらいかかるんです。今800万円で済んでいるものが8,000万円かかってしまう。ということは、もうおのずと、とにかく燃やすごみを減らして、その8,000万円かかるというものをとにかく、10分の1にするということは800万円ですね。今800万円かけています。10分の1にすれば800万円で済む…というわけでもないのかな。ごめんなさい。今のは数字が間違っていました。実は10分の1にするためにはやっぱりお金をかけて灰を資源化するんです、この計画でも。だからそれが8,000万円はかからないですね、ごみの燃やす量を減らしますから。それでも、もしかしたら4,000万円かかるかもしれません。それは皆さんがどれだけ協力するかによって灰の処分のお金がどれだけ減らせるかと、こういうことになるわけです。

そういうこともあって、とにかく今から生ごみとそれから植木の剪定ごみ、もう燃やさなくても自然に分解できるもの、これを徹底的に資源化できる、そういう取り組みをもうしようというのがこの22年度からの取り組みなんです。それで今あちらで説明いただいたようないろいろな手法を駆使して、それでできるだけ地域で処理、処分というか、資源化なり減量化できるやり方を進めたいということでございます。

私も昨年の10月から「バクテリアdeキエーロ」を家でやっておりまして、私が台所から生ごみをそこに投入する係でやっておりまして、簡単です。ただ、5人家族なのでちょっと生ごみがそこそこ出るので、1台ではちょっと消化するのに冬場はきついかなど、そんな感じで試行錯誤していますけども、とにかくもう、私はもう一戸一戸家庭に訪問してでもですね、とにかくみんな

で協力しようと。例えば自治会でこれらごみ処理機を入れていただければ、今、山の根でやっているような公園の管理等をやったりして、本当にこれはもう地域の顔が繋がっていくという、別の意味での効果も非常に大きいと思っているので、ぜひ皆さんに御理解いただいて行政と一緒に進めていきたいなというふうに思っております。どうぞよろしく願いいたします。

それでは、説明はこの程度にして、皆さんとの質疑あるいは意見交換をしたいと思います。よろしく願いします。それでは、長くなりましたけど、しゃべりたい方、どうぞ時間をいっぱい取りますので、お手を挙げていただいて、御質問あるいは御意見をいただければと思います。いかがでしょうか。あ、さっき抽象的だとおしかりを受けて、少しは具体的な…。

【市民】 桜山2丁目の自治会の役員をやっている中村と申します。今日うちの代表のほうに1週間前ぐらいにこの会へ出席してくれと特別に電話かかってきたというので、それじゃあ協力しようというので役員3人で来ました。ちょっと横にそれですけど、自治会は総合防災訓練だとか避難所だとかですね、何かというとはですね、市民協働課の下請みたいなのですね、できるだけ協力している割にはあまり支援してもらっていないというのが私のいつもの持論なんですけども。ちょっと横にそれで恐縮です。

最初ちょっと気合入れるためにやじ飛ばしましたけど、今の市長の話はよくわかります。ああいうふうに最初に話してもらおうと、そのように切迫しているからと、具体的にこんなのあるけど、その各メーカーさんだとかの説明とか、今の山の根さんの話とか良いこと言ってますね、余計なこと言いましたけどね。それでですね、市長のお話のポイントからいきますと、その処分場に、そこそこね、8年分でもスペースがあるうちに…要は10年というね、この何ですかね、行程表は作るとなれば半分ぐらいにね、圧縮しないとね、もっと先送りになってしまいますよね。何ですかね、その転圧したとして、最後いくらかやっぱり出てきてしまうんでしょから、それとの闘いですからね。まずそれを感じました、市長のお話からはね。

あとですね、剪定枝のチップ化というのは、今回何ですか、補助が出るからやるのか知りませんが、それも15%ぐらい占めているんだったら、方法論としてはね、焼却しなくていい、焼却も金かかるんでしょし、そんなのは…それも別に今年、来年とは言いませんけども、3年、4年でもうほとんどそのチップ化してしまうとかね。要は、今最近逗子というのは文化だとか高齢者云々というのに結構金かかっていますが、国の補助が財源だと言うかもしれませんけどね。極力ごみ問題というのは優先順位、多分3本指に入ると思うんで、財源の問題も含めてですね、やれそうなものはもっとスピードアップしてというのは市民感覚ですね。とりあえずこの辺で。

【平井市長】 はい、ありがとうございます。もっと急げと、スピードアップしろと、ごもっと

もだと思えます。計画は作りました、これを前倒ししてでも達成するために私も全力を挙げたいと思えます。1つだけ言い訳をさせていただくと、鎌倉とのですね、広域化の問題がずっと10年ぐらい、横須賀も含めて問題が議論されてきました。ようやく今年の2月に鎌倉との広域の処理施設については、協議は続けますけど、基本的にはもう共同で焼却施設をつくるのは当面やめようという結論がようやくまとまったと。それで、今ある池子の、これまた非常に皆さんに本当大変申しわけないんですが、池子の今の市の焼却施設を、もう27年たっていますけど、大規模改修して10年以上を延命化するという事になったんですね。したがって、本当これらの議論を、他の自治体との関係を整理するだけで本当に何年もかかって、ようやくこの22年度からもう逗子独自でねじ巻いてやるという環境が整ったということです。葉山の松本さんもいらっしゃっていますけど、葉山もその辺今頑張っていて、ね、やっつけていかれているようで、おとといだったか新聞に載っていました。資源小屋というのをつくったんですね。あそこはどこの自治体でしたっけね、一色のね、町内のところにペットボトルとかそういう、ふだん収集をしている資源物を持って行ける資源の小屋というのをつくられて、それは地域の人がそこに自分で瓶・缶とかペットボトルとかそういうものを持って行って、その品目はもう収集しないんですか。その地域は。生ごみとか燃やすごみ、容器包装プラスチックは戸別収集をその地域だけはやるという実験を始めましたね。そんな取り組みをお隣の町でもやっていますので、ここはぜひ逗子もですね、葉山に負けじ、いろいろな取り組みをしたいなと思っています。ありがとうございました。

はい、どうぞ、ほかの方。どうぞ、はい。

【市民】 私、市の或る環境団体の者ですけども、先ほど三洋電機の佐藤さんに冒頭お話があったように、電気器具を使うのではなくて、自然のバクテリア、微生物のバクテリア等でやらすのが一番いいですよと、もうあれに尽きると思うんです。といいますのは、私どものこの前の例会で非常に話題になりましたのが、大型生ごみ処理機をいろいろ扱っているのがいるんですが、それらのいろいろ検討をした結果ですね、生ごみを全部燃やすというと、燃やしますからCO₂出るでしょうかね。ところが、今、今度全部電気で乾燥、加熱、脱臭、そういう資源の堆肥化ですか、そういうものを電気で全部やらすとしますと、二酸化炭素はどっちが大きいかというと、平素の生ごみを、水分もかなりあれでしょうから、灯油か何かかけて燃やすと。そうしたほうが二酸化炭素が少ないんだそうですよ。それで電気で、全部電気でやらすというその大型化装置を使いますと、かえってCO₂が多くなるという結果が出まして、そういうその大型機器を買うのに、市の方ではどうして助成金を出すんだろうかという話がありまして、それではいつか何かの機会でお話ということで、環境審議会には運営委員会というのがあるんですが、私もそばにCO

2部会のある方がおられまして、そう言いましたら、いや、それはまだ市の方では助成金を出さかどろかはそんなの決まてないんだというお話ですけども、今度の広報を見ますとそういうことの処理費が出そうだと。そういうことですね、メーカーの方は便利だけを追求せず、先ほどバクテリアの燃やしてもいいですよというのはまさにそのとおりだと思いますけど、どれだけエネルギーを使ってやっているのかというようなことにも配慮していただきたいと思ひますし、市のほうでもですね、ああ、ちょっと便利だなというのですぐ助成金というのにいかないで、もう少し、ね、本当に地球に対してはどつちが優しいのかとか、環境問題というのを検討する部会もちゃんとおりますので、その辺を考慮していただきたいなと、それが私の意見でございます。以上です。

【平井市長】 ありがとうございます。できるだけお金とエネルギーを使うなと、これも本来はゼロ・ウェイストのね、発想だと思うんです。私もできるだけ、さっき申し上げたように、家庭でできるのが理想だと思うんですね、お金をかけずに。「バクテリアdeキエーロ」だったら最初に買えばコストはかからない、それ以後。コンポスターなんかもそうでしょう。ただ、あと集合住宅であるとかあるいは学校とかありますよね。今、池子小学校に大型生ごみ処理機の堆肥型が去年の秋から入っています。給食の残渣が出ますので、こういうのはできれば各学校にもね、すべて配置をして、そこでできた堆肥は学校の菜園とか地域の人に活用してもらうようなこともやりたいです。とにかく、逗子に2万3,000世帯あります。2万3,000世帯がすべて各家庭でこういうのをやってくればそれはパーフェクトなんですけども、なかなかそうはいかないと。したがって、その各家庭のもの、それから地域でやる大型のもの、それからそれでもできない場合には生ごみを分別して収集して、市がどこかで集中して処理しなければいけないということも考えなければいけない。そのいくつかの組み合わせで、とにかく生ごみを全量分別資源化・減量化していこうと、こういうことなので、ぜひ私も、さっき言ひました、なるべく集めない、各家庭でできるものとはにかく2万3,000世帯のうち1万世帯でも、1万5,000世帯でも各家庭でやれるようにしたいと。そのかわり1万世帯はどうしてももうできないということになったときに、じゃあ地域でできること、それでもできなければ集めてでもどこかで堆肥にするなりということをやりたいというのをやるので、とにかくまずスタートは、家庭でどこまでできるかに挑戦したいなと思ひています。ありがとうございます。

ぜひこちらに説明いただいた皆さんへの質問なり、御意見も、せっかくきょういい事例を発表していただいたので、いただければなと思ひますが、いかがでしょうか。今の関連ですか。

【市民】 関連ではないんですけども、やはり集合住宅なんかでは堆肥を出て手間暇かけてや

るというのも非常に一つの案だと思ひまして、たまたま先ほどの話の中で山の根の自治会がトーマポール広場というところ市長さんも感激してくださいました、花をすごく咲かせている、あそこでも利用してくれているんですが、その会長さんが今ここにいらしていますので、鈴木さん。全く市販の肥料を使わないでやったださっている方がいますので。

【平井市長】 済みません、先ほど手を挙げていただいた方、この後でお願いします。どうぞ、鈴木さん。

【市民】 ファミール逗子の応援団として。さっき野内さんがお話ししたことに、ちょっと補足してお話をします。「ゼロ・ウェイスト」ではなくファミール逗子から出る堆肥を使って、どうやって花を咲かせているかという話になってしまうんですが、それでよろしいですかね。

秋口になりますと自治会の方はファミール逗子から実は堆肥を片隅に、公園の片隅に持ってくるんです。そのまま使えるかというところではないんですね。持ってきたごみはまだ生でしてね、これ置いておくとかかなり熱を出して発酵します。これに鎌倉の植木剪定ごみ^{*}、あれを実は持ってきてましてね、半分ぐらい混ぜているんですが、混ぜて秋から冬にかけてですが、しばらく置いておきますと熱が出ますね。何回かひっくり返して完全に発酵をさせて、冬の元肥として使っているんですよ。元肥として使いましてね、それだけではなく、それに発酵鶏糞も実は混ぜているんです。発酵鶏糞。化学肥料ゼロというのはちょっと言い過ぎでしてね、若干溶性燐肥という肥料は若干使っています。しかし、ゼロ・ウェイストのゼロに近いですね、そういう使い方をして、肥料はその元の、年に数回その発酵鶏糞を追肥として使っているというような形でこの花は作っているんですが。ということで、ゼロ・ウェイストではなくてどうやって花を、ファミール逗子の堆肥を活用して育てているかということなんですけど、要は、もらってきたそれをしばらく寝かせておくというのがミソなんですね。もらってきたやついきなり使えるかということこれ使えませんね。そんなことが補足です。これだけの話ですが。

【平井市長】 ありがとうございます。それではさっきお手を挙げていただいた方…。

【市民】 ずし環境会議のごみ部会の鈴木と申します。私もちょっとお話ししたいのは、このまちづくりトークのですね、このごみ問題についてのことなんですけども、すいません、ちょっと真ん中の歯がね、きょうね、抜けてしまって、空気ここから漏れてしまって、話しにくいしお聞き苦しいかと思ひますけど。きょうの話、非常にいい話だと思ひますね。ただ、残念なことは

^{*}鎌倉市では、市民を対象にして植木剪定枝堆肥を配布している。市民以外への配布は行っていないことを後日確認。

人数が非常に少ない。これを何カ所かに分けてやってもですね、果たしてその逗子の6万近い人口のですね、何割のそれが話が浸透するだろうかなということなんですね。そうやって見ますとね、できるだけこれを各地域別に、町内会とかそういうところ中心にですね、あるいはその他いろいろなボランティアの方に協力してもらって、こういった話の機会をできるだけふやす必要があるのではないかなと思うんですね。ただ、そうかと言って、そうすると市長は年がら年中出てなくてはならなくなってしまうし、それから市の職員の方も年がら年中と、これは実際には不可能だということで、やはり町内会の中でですね、自治会の中でまたそれを地域別に分けたようなね、10人とか20人ぐらいのミニ集会というものをやっぱりあっちこっちでね、できるようなシステムをつくるのが大事ではないかなと思うんですよ。

それにはできるだけそういったボランティアの人を増やして分散化していくんですね。何ていうのかな、キャップがいて、キャップの下に手下がやっぱり何人もいて、その下にまた手下がいるというようなね、そういうものをたくさんつくってね、それで中には年取った人なんか出てきませんしね、来てもわかんないと、あるいはやろうと思ってもやれないという人もいっぱいいると思うんですよ、ごみの分類の問題でも。そうしたらこうやってやるんだよとか、一緒にやろうよとか、そういうような人をね、協力者をやっぱりふやしていかないと。市長はこれで何とかこれからふやして、半分あるいは3分の1、4分の1でもとさっき言われてましたがね、ぜひそれは大事なことですけど、それをどういうふうにしてふやすのかということをして市としてはもっと考えて、深掘りして考えてもらう必要がある、そういうふうに思います。すいません、歯が抜けてしまって話できなくて、どうも失礼しました。

【平井市長】 ありがとうございます。今のお話が本当に一番の多分ポイントだと思います。実は私もぜひ皆さんにそれを投げかけたいなと思っていました。どうすればこれが1万世帯、1万5,000世帯に浸透していくのかと、こういうことですね。その辺の、日ごろ自治会の皆さん本当にいろいろな場面で御協力いただいているので、本当に何でもかんでもお願いするのは大変申しわけないんですけども、それを是非やっぱり行政だけで考えていてもだめなので、皆さんと知恵を絞ってやっていく必要があるなと思ってますし、いや、実は、今、山の根の地区がね、クローズアップされていますけど、これも山の根なんですけど、安心生活創造事業という、これは福祉の方が始めた、社会福祉協議会に委託でやっていますけど、地域の高齢者、特にひとり暮らしの方とかを中心に、地域で見守っていろいろな支援をしていくようなネットワークをつくっていくという取り組みを始めました。だから、行政はどうしても縦割りなので、福祉は福祉のほうでそれは社協をやっているし、ごみはごみで資源循環がやっているし、自治会のことは市民協働課が

やっているしというので、それぞれがなかなかつながっていかないところがなかなか悩みの種で、これを何とか、やはり同じ地域の課題だからそれぞれの人たちがネットワークでいろいろな課題を共有することで、当然お年寄りの方には福祉のケアも必要だし、ただ、じゃあごみを出さないようなというのはどうしたら地域でできるのかということと一緒に課題として話しながら広めていける、そんな取り組みをね、ぜひ進めたいなと思っているので。実はこのまちづくりトークも今まではテーマ別にやっていました。この3年間ぐらい。私はもうずっと前から今度はこの地域に行って、地域でそれぞれ福祉だとか教育だとか、環境だとか防災だとか防犯だとか、いろいろなテーマが同じ地域の中であるので、今度はその横断的なその議論をこの地域に入って皆さんとやる場面をつくりたいということはもう常々思っているんですが、なかなかまだそこには至っていないので、今、先ほどいろいろな御意見あったのを参考にして、ぜひその次の段階に進んでいきたいなと思っております。ぜひ何か具体的なですね、市民としてどういう取り組みをすればいいのかというようなことをね、御提案があれば大変ありがたいなと思っておりますが、いかがでしょう。ほかの件でもどうぞ。

【市民】 すいません、きょう2回目なんで、もうこれでおしまいになりますけど。今の市長のお話はですね、我々自治会のことをようやくわかってくれて、本当にうれしい話でした。例えば、自治会代表者…何だ、連絡会議だとか何か、ああいうときも今言われたようなテーマいっぱいありますよね。安心安全創造もありましたし、みんな地域の協働だとかコミュニティーだとか、自治会の協力得てとかですね、そういう状況に置かれていますね。それで、今まさにああいう場できょうのテーマなんかも含めて、これはどう思いますか、これはどう思いますかと、こういう会というのは市民の生の意見を聞いて参考にして行政に生かすということだと思うので、今、市長が言われたような方向にいかにかこれは取り組めるかです。

それで、きょうはこのゼロ・ウェイストのことなんで、1点さっきの補足的なことですけども、それを達成するためにですね、さっきのあの…何ですか、そちらのほうの皆さんのその生ごみ対策の、それとですね、今、市長の話の中でちょっと気になったのは、2万3,000ですか、2万5,000世帯のできれば3分の1でも、半分でもと言いましたけど、例えば地球温暖化で今政府はエコキュートという大気のヒートポンプで、大気の熱で冷暖房をやろうというのを、今普通の風呂だとか家庭の給湯器を将来はそれこそ半分以上普及させようという、あれは多分具体化すると思うんですね。それで、今のこのゼロ・ウェイストにして、各逗子の世帯にどのくらい導入ね、現実的に可能かというね、可能性ですよ。夢とか希望はそうですけども、現実論でね、高齢化がどんどんね、進んでいて、もう来年か再来年には65歳以上が25か、ぐらいになりますよね、逗子市

も、もうなっていますか。そうですね。そのときに、逗子はこの間、建物をあまり小さく小刻みに売るのはどうかという制限ありまして、いわゆる高齢化でスペースも狭いところが多いですね、道路も狭いですし。そういうところへああいう設備入れられるかだとかですね、そっちにも限度があるし、聞いてみると堆肥も出てきてもその堆肥もある程度は工夫しなければ使い切れなんでしょうし、手間もかかるしと。そろそろごみステーションにごみを持っていく人も、持っていくのも大変なお年寄りがふえていると。現実論を考えれば、市の職員がそういう能力がなかったら専門のコンサルのところに委託してですね、今このゼロ・ウェイストの挑戦へのそういう行程表が、要は仕分けですよ。それでないと、今度はこういう補助金やりましたよとかメニューそろえて、ちょっと何かやっているよという格好をつくっても、今、目指しているものの現実的なね、何だと、結局は有料化だとか、もっと市が基本的には集めて、集めたものをできるだけローコストで、それでごみをできるだけ少なくする方策を、もう行政として具体的にね、もっと早く考えて、市民に示すということも現実論だと思ったんで、ちょっと添えます。以上です。

【平井市長】 ありがとうございます。ロードマップを示せと、こういうことですので、早速というか、資源循環課の方にもどういう段取りでね、これを具体化していくかということをしかりとステップ・バイ・ステップでできるように考えたいと思います。特に、いつも思うんですけど、どうしても高齢者の方がね、こういう場面でも積極的に参加していただいている、若い世代、私もちょうど子育て世代ですけど、あるいはその小・中学生も含めてどうやって地域全体でこういう課題に取り組んでいくかということがものすごく重要なと思っています。子供たちだって今、大変環境についての関心がものすごく高く、ごみは出さないようにとか、分別しなければいけないとか、CO₂はね、出さないようにとかというのは、本当に我々が子供のころから比べればもう何倍も知識もあるし、関心も意識も高いんですね。だから、ぜひ私はそういう意味では学校の中でどういう環境教育しながら、地域に本当にこの実際のね、ごみの課題に子供と一緒に、あるいは若いお父さんお母さんと一緒に地域全体で取り組む機運というんですかね、これをつくっていくかというのがものすごく大切で、それは先ほどもおっしゃった、なかなか高齢者になってね、自分ではごみを持って行けないような方にも、本当はその地域のその子供たちも含めて、じゃあ自分たちがそういうものをね、手伝ってあげますというふうな人のつながりができると、そういうものも解決するなというふうに思っている。これはだからその意味でも今各学校に、小・中学校8校ありますが、学校支援の地域本部というのを21年度立ち上げました。今度は地域や学校をどう支援していくかというその取り組みなんですけども、今度は逆に学校あるいはその子供たちが地域にどうやってそれをね、自分たちの力を生かせるかというふうなことをやりた

いなと思っているので、その意味でも今学校も中心になっていろいろ進めていることをぜひ自治会の皆さんとか福祉の関係の人とかとつなげて、こういった取り組みをぜひいろいろな人がかわれる仕組みをね、つくっていききたいなと思っています。ぜひ、学校支援の地域本部も各学区に全部ありますから、そういったところの高齢者の皆さんと子供たちが日ごろから接して人間関係が密になって、今でも見守り隊とかとって地域の高齢者の方が登下校をね、安全確保に協力していただいていますけども、そんなことを広げていききたいなと思っています。ありがとうございました。

【市民】 池子の方から来ている有田と申します。今、自治会等のお話も出ましたんですけど、私も自治会の方をやっています、自治会ではもう今の市から言われている作業で手いっぱいになっているというのが現状なんですよね。これ以上やっぱり何かをやらせようという状況ではなくて、やはり今言われたようにここに来ている人たちは大体がもうその意識はあると思うんですけど、来られていない方たちの意識をどうやって変えていくかというのが大前提になってしまうと思うんですね。私もそうなんですけど、生ごみを自分の家でほとんどコンポストで消化してしまっているんで、何でほかの人のことまで考えなければいけないのかということ、大型の生ごみ処理機を置かなければいけないなと思っているんですけど、やっぱりほかの人はどなたかがやっぱり主になってやらせなければならぬ。いろいろ考えてはいるんですけど、それでもやはり、ね、妻に言わせると何で人のことまでやらなければいけないのとよく言われるんですけど、それでもやっていかなければいけないという状況があるんですけど。本当に、ですから、ここに来られていない方たちをどうやってこういうことがあるというのを気づかせるかというのが大前提だと思うんですね。やはりここに出てきてもらえればそれなりに新しいことには挑戦してもらえらると思うんですけど、その辺を今後ちょっと考えていききたいなと思っています。

【平井市長】 はい、常に悩んでいる悩みでございます。それで、こういう説明会とかね、トークの場面をつくっても、やっぱり来られる方というのは、決まった方と言うと語弊がありますが、なかなか、多くても4、50人、頑張っても100人、こういうことだと思うので、やはり仕組みとか仕掛けで人が動かざるを得ないものをつくりたいとだめなんだろうなというふうに思います。それで先ほどちょっと事例で申し上げた葉山の資源小屋というのは、もう仕組みにしてしまっているわけですよね。そうすると、もうこういうところに来なくてもこういうふうに、実験とはいえ資源物についてはもう持ってこれる人はここに持ってきてくださいと、回収しませんという形で参加を誘導して、ごみをできるだけ出さない、資源化する、そういった方向に

持っていこうとしているので、やはりその意味での仕組みをどうつくって人々の暮らしにそれを
持っていくかということは、すごく大切な発想かなとは思っています。

【市民】 前に座っていらっしゃる岡崎さんと一緒に逗子ゼロ・ウェイストの会で活動をして
いる室伏と申します。実は私、今の職は違うんですけども、このゼロ・ウェイストを初めて取り
組んだ上勝町にですね、出入りする業者というかですね、コンサルタントみたいなことをしてい
まして、そのときに感じたことなんですけども、今回もそうなんですけども、このごみの問題は
ですね、行政から市民へのお願いという形になっているんですね。でも、これ本当は違って、
自分たちの問題をどう解決するかということなんですけども、市長と同じ世代、我々にとってみ
ると税金を納めていてごみを収集・回収するのは当然のサービスだと、行政サービスだ。それを
減らすことに対して協力してくださいという、そればかりが先に立ってしまってなかなかこう
いう場にも出てこないと思うんですけども、先ほど市長言われたように、ごみの処理にかかって
いる税金を別のことに使いたいんだと。そういったことのために、何に使うのか、例に出された
教育の問題ですね、10億円と教育と同じだけの投資でもごみ回収に使っているわけなんですけども、
それを全額無理にしても半分ぐらいを教育に使いますよと、それ以上のメリット、嫌な言葉なん
ですけども、メリットが皆さんにもあるんだから、協力というかですね、一緒に考えませんか
というような打ち出し方があるのではないかなと思っています。

今、具体的な案として先ほど今年度試行的に拠点回収をやるというお話あったんですけども、
例えばそれを自治会あるいはその地元の団体にですね、委託という形で運営を、お金を出して、
市がお金を出してでもですね、自立的な運営をするやり方を考えてもらうとか、そういうふうな
ことというのをやっていけばいいのではないかなと思っています。というのは、資源の回収と
いうのはやっぱり資源なわけですから、資源というのは価値あるものなんです。今ごみとなっ
て価値がないものというふうに思われていますけども、それ価値あるもの、それをうまく活用す
ることで、やっぱりそのコミュニティービジネスみたいなですね、小さな事業にもなっていく可
能性は大きいと。そういったことを私が入りしている上勝町なんかはまさに実践している
わけで、有名な話として、こいのぼりをバッグにしておばあちゃんたちが売っている、上勝町の
葉っぱビジネスで有名なところなんですけども、その方法としてそういったものをですね、商品にし
て売っていると。それは微々たるものなんですけども、おばあちゃんたちの生きがいになる、孫
の小遣いにできるというようなことで、それで介護費用も減っているとかですね、そういうメリ
ットをどんどん生み出している。それがまさにまちづくりトークにゼロ・ウェイスト、ごみの問
題関係してくるということになると思うので、ぜひそういう打ち出しをしていって、先ほど話題

になったロードマップもそれ市がつくるのではなくて、NPOとか住民も交えてですね、つくっていくものになるのではないかなというふうに私は思っています。

それで、先ほど基本計画の説明の最後に、市民との協働とか事業との協働の仕組みをつくらなかったんですけども、それをまさに具体化していただきたいといいますか、一緒にやっていきたいなと思っています。（拍手）

【平井市長】 ありがとうございます。「バクテリアdeキエーロ」も逗子のNPO法人が商品化をして、市民の力でね、地元のキリガヤさんというね材木を扱っていらっしゃる企業と連携をして、製作をして販売をして、それを市が助成しているという、そういう官・民・市民の三者の協働という形になっていますので、是非御指摘のことも取り組んでいきたいなと思っております。

【市民】 逗子の渡辺といいます。3点あるんですけども、最初の2点はもう皆さんさんぜん市長さんにお聞きになっているので、特に回答は求めないので話だけ聞いていただければ。

私も実は、皆さんにこんなこと言うと怒られそうなんですけども、自治会に入っていないんですね。若い人、最近、私ここに住んで7年になるんですけども、私の周りでは結構若い人が新しく入ってきているのが多いように見えるんですね。そういう人たちは自治会に皆さん入っていないんですよ。そういう人たちはどうしていったらいいんでしょうかというあたりは、今、先ほどもお話があったと思うんですけども、そういうところを巻き込んでどうやってやるのかということとはよくよく、自分も含めてまず自治会に入りましょうみたいなどころなのかもしれないんですけど、そういうことを考えていかなければいけないのが一つ。

これは別にもういいんですけども、あともう一つは、先ほどからCO₂だとか、あと堆肥化やられるに当たって堆肥化したものは必ずものが出てくるんですけども、その需要が逗子の中に本当にあるんでしょうかというのには必ず疑問としては出てくると思うんですね。幸い、沼間さんとかあと今やられている取り組みの中では全く問題がないように話が出ているんですけども、そういった需要があるのかというのと、あと先ほど言っていたCO₂の話というのはそこらじゅうでやられていると思いますので、そういったことを市の判断の中に使えるように横断的に集計して、これやったらCO₂はふえるんだけどお金は減るんだよとかですね、逆にこれやったらもうCO₂は減るんだけどお金がついていきませんよ、こういったことをある程度ぱっと見渡せるような整理の仕方をぜひやっておいていただければなど。必ずこういう議論がいつも毎回毎回出てきていると思いますので。それがお願いの部分。

これからはちょっとお聞きしたいんですけども、先ほどのキエーロの松本さんなんですけれども、うちも実は電動生ごみ処理機やっているんですけども、もうあふれてしまっていて、

結局電気使って生ごみをやっでごみに出している。まさに先ほど言ったCO₂の無駄といえども
ちろん無駄になっているんですけども、必ず生ごみを堆肥化というか、ああいう土でやった場
合というのは窒素、リン、カリというのは必ず出てくると私は思うんですけども、それが本当
になくなるというか、ふえない、あるいはあの中は実際すごい窒素過多になっているのか、リン
過多になっているのか、つついそういうことを考えてしまうんですけども、本当に消えて何
もないんですかね。

【松本】 そういう意味では、ありません。多分窒素過多ぐらいに少し寄っているのかなとは思
いますけれども。生ごみは大体9割ぐらいが水分と言われてますよね。そうすると、10キロ投
入したとしても、ごみそのものは1キロぐらいだと思えますよね。それを入れてそこがまた50
分の1とか100分の1になりますので、もうほとんどふえるはずがないんですね。100キロぐらい
投入したって1キロ以下。そうすると、1年間の一般家庭のうちの投入量から見ればですね、1
キロぐらいあるかもしれませんが、1キロの土ってほとんど無視できるほどのあれなので、
実際はふえないと。中がどうなっているんだと言えはですね、実際にはいい堆肥にはなります。
堆肥にはなりますけど、花にやるときにそれ使いますけど、そうすると減ってしまいますので、
また土は足しています。だから、私が始めたのは堆肥につくろうと思って最初始めたわけではな
いんですね。生ごみを消そうと思って始めたんで、堆肥にはならないんですかとよく聞かれるん
ですけども、いい堆肥にはあるときになりますけども、必ずしも堆肥が欲しいという人ばかりで
はありませんので、いらないという方も結構いますので、そういう方が、ただ消えていつまでも
ふえないのでいいのではないかなと思います。それで実際にふえません。

それと、ついでと言ってはなんですけども、先ほどから市長の話にあった資源ステーションの
話、私が住んでいるところの一色台という団地の話なんですけれども、3月31日にごみのステー
ション全部廃止しました。それで、4月1日からは戸別の収集に変えまして、可燃と容プラのみ
ですね。あとは資源ステーションで全部集めるという形になりましたけども、行政主導というよ
りは我々住んでいる者から話が出て、最初の話はどっちかというあれはありますけれども、協力
しながらやっていったわけなんですけれども。先ほどからの皆さんのお話にあるように、やっぱりな
かなか行政主導だとですね、税金払っていると、おれたちは税金払っているのに何でこれ以上負
担しなければいけないんだという話は必ず出てきます。それから、お年寄りで動けないとか、持
って行けないとかいろいろな話が出るんですね。

ですから、そこが課題で、それとあと広がりですね。またこの会合にあの人も来ている、この
人も来ている。いつも同じ方が何割か来ているということで、それどうやって広げていくんだと

いったらもう本当に永遠の課題だと思うんですけども、一つ我々の団地でやってわかったことはですね、行事とか何かを自治会がやられるとすると、あいつと一緒にだったら行かないとか、そんなのいいだとか、出てこられない方もこのごみの問題というのはすべての人にかかわってきますので、好き嫌いではなくて必ずすべての世帯のお話なので、やってみてわかったのはですね、今まで全くこのごみの問題がなければつき合いがなかったお年寄りなどが皆さん出てこられてですね、非常に団地の中が活性化したということがありました。だから、目に見えないメリットがあったなど。

それで、国民性というんですかね、できない理由はいっぱい述べるんですよ。行政のほうもそうですけどね、これだけはできない、あれだけはできない。そういうときどうするかというよりも、一つ一つとにかくつぶしていくんですけど。じゃあ、やるためにはどうするんだ。もうとにかく、何でもやってしまう。やるためにはじゃあどうするんだということで、もうしつこくとにかく、もう最後の最後は、じゃあいいですよ、私ごみ取りに行きますよと、そういうところまでやっていくと、まあ、じゃあしょうがない、やってみるか、できるならやってみなさいよということでスタートしてみると、ああ、やっぱりやってみたらこんなに楽だったということになるんですけども、やっぱり皆さんが言われるように、最初じゃあその広がりはどうするんだということになると、それは相当エネルギーがいる話だと思います。ですから、1人でやれとなると大変ですから、ちょっと…しょうがないんですけど、地道に仲間をふやしてやっていくほかはないのかなということですね。それと、事例を紹介していくということで、私は葉山に住んでいますけれども、逗子のどんな場所でも出かけていきますので、御要望があれば使っていただければと思います。（拍手）

【平井市長】 はい、ありがとうございます。そろそろ2時間がたちましたので、あとはブースがあつて個別に見たい方もいらっしゃると思いますので、この程度にしたいと思いますけども。これからどうやって広げていくのかということは本当最後の最後、最大の課題だということだと思います。今、松本さん、葉山の松本さんから御紹介いただきましたけど、やはりモデル地域になってもらえる地域をですね、やはり手を上げていただいて、そこの皆さんと行政がああでもないこうでもないと言って、今、松本さんも御紹介いただきましたけど、できない場合にじゃあどうすればできるのかというのを一つ一つ積み上げていって、そこにノウハウが、ね、蓄積されて、じゃあ次の地域、じゃあ私たちもという流れをつくっていくのが一番近道なのかなというのは今実感をしました。ですから、きょうお集まりの皆さんの地域で、ぜひじゃあ我が地域で取り組もうということを持ち帰っていただいて、それで行政のほうもね、そこに一生懸命まずは資源を投入し

てやっっていこうということを是非検討できればなというふうに思っております。

先ほど御紹介したように、植木のチップ化の機械とかも入りますから、これは持ち運べるものですので、緊急雇用の国からの交付金を使って持ち運ぶ人までちゃんとお金を払って雇えますので、そうするとじゃあ自分の地域でどういうことをやればいいのか、生ごみの問題、植木の問題、それからさっき出た資源回収拠点の問題。ですから、本当はその地域の活動センター、会館がありますよね。その会館にそういった資源物をね、集積するちょっとのスペースを設けて、じゃあみんながそうやって集まって公園の管理したり生ごみ堆肥化したり、それで地域のそれぞれの助け合いの関係ができたり、子供との関係ができたりして徐々に広がっていくということになればなというふうに思っていますので、山の根のきょうはパワーをすごく感じたのですが、山の根の皆さんに私からこれ以上のお願いはできませんけども、それぞれの地域でぜひ考えていただいて、また行政と色々な場面でこういう話をできればなと思っております。

本日は本当に長い時間御説明させていただいて、そして活発な御意見をいただきましてありがとうございました。残りは各ブースでちょっと時間を過ぎててもやっておりますので、回っていただいてお帰りいただきたいと思います。本日どうもありがとうございました。（拍手）

【司会（福本市民協働課長）】 はい、ただいま市長のほうから終了の発言がありました。まだそちらにありますので、どうぞ実際にごらんになっていただきながら、発表者の方々の、まだまだ細かい話があるかと思しますので、お聞きになっていただけたらなと思います。あと資源循環課の職員も残っておりますので、個別の相談等ございましたらお声をおかけください。あとアンケートですが、お帰りの際、出口におります職員の方にお渡しをいただけたらなと思います。本日はどうもありがとうございました。よろしく願いいたします。